

## マルコによる福音書 1 章 9-15 節

2014 年 5 月 21 日

古本 靖久

1、聖歌 438 番 「主よ 命のことばを」

2、お祈り

3、テキストの位置

本日の箇所は、マルコ福音書の序文の後半にあたります。マタイ福音書やルカ福音書と違い、イエス様の誕生物語がないのは前回お話したとおりです。マルコ福音書が描きたかったイエス様の出来事は 16 節から始まっていきますが、その前段階としてイエス様の存在の意味を 15 節までで読者に強調していきます。

序文	1:1	福音書全体の表題
	1:2-3	旧約の引用
	1:4-8	洗礼者ヨハネの記述
	1:9-11	イエスの受洗
	1:12-13	イエス、誘惑を受ける
	1:14-15	イエスの伝道開始

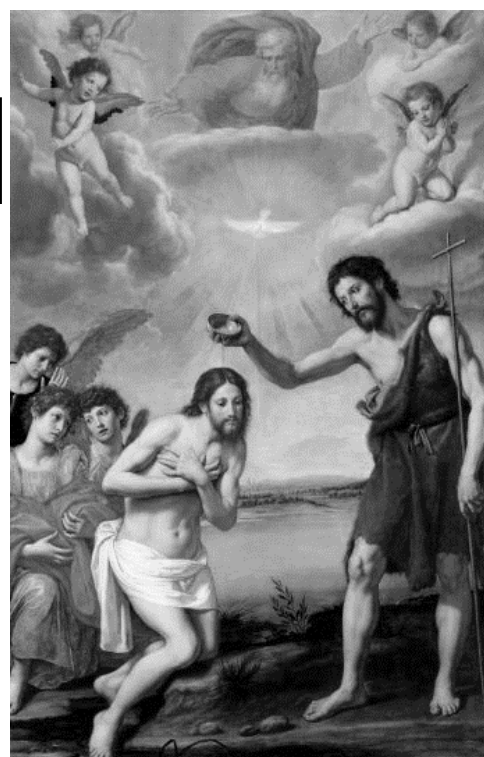
イエス様は今回の箇所の中で洗礼を受けられ、誘惑を受けられ、神の福音を宣べ伝えます。そこに込められた意味は何なのか、考えていきたいと思ひます。

4、1 節ごとに

### ◆イエス、洗礼を受ける

**1:9** （そして）そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。

今回から、上には基本的に新共同訳聖書の訳を載せますが、原文を見て補足したり変更したりする必要があるところについては（ ）をつけたり、二重線で変更したりして対応していきます。この 9 節にも（そして）と付け加える部分を書きました。初回の学びの時にも触れましたが、マルコ福音書の著者は、あまりギリシア語が得意ではありませんでした。だからでしょうか、文章の頭に「そして」という語が大変多く出てきます。新共同訳聖書は礼拝で読まれることが多いので一つ一つ「そして」とは訳してはいけません。ですがこの学びでは、原文どおりに訳していきたいと思ひます。



ところでみなさんはイエス様の洗礼について、どう思われますか。わたしは以前、イエス様はどうして洗礼を受けられたのかが、不思議でした。罪のない方なのになぜなのか。またイエス様のことを「わたしよりも優れた方」と言っていた洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたのも理解できませんでした。罪人であるわたしたちと同じところに立つためにとか、罪人であるわたしたちに代わって、さらにはイエス様自らが悔い改めの姿勢をとることでわたしたちに見本を見せられた、などという解釈はできるでしょう。しかしマルコ福音書は驚くほどあっさり、このイエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けたという事実のみを伝えます。

どうやらイエス様が受けた洗礼については、マタイやルカの時代にすでに違和感が感じられていたようです。その結果、マタイ福音書には3:14-15に見られるように、イエス様と洗礼者ヨハネとの会話を補充して、「何故」という問いにこたえようとしています。またルカ福音書には、洗礼を授けたのは洗礼者ヨハネだとは一言も書いていません。ついでに言いますと、ヨハネ福音書にはイエス様の洗礼そのものが描かれていません。

このことはわたしたちに「イエス様の洗礼は歴史的事実だった」ということ深く印象づけます。イエス様の無罪性や洗礼者ヨハネに対する優位性を強調したい福音書記者にとって、イエス様の洗礼はあまり触れたくない部分だったはずですが、でも書かなければならなかった。伝えなければならなかった。その内容を10-11節に見ていきましょう。

**1:10** (そしてすぐに) 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。

天が裂けたこと、また霊が鳩のように降って来ること、それを見たのはイエス様だけでした。マタイやルカではもう少し客観的事実として描かれていますが、マルコにとっては誰か他の人が見たり聞いたりした、ということは全くどうでもよいことでした。また、マルコ福音書においては、イエス様は何者なのだということが、物語の登場人物に隠され続けていきます。読者にはイエス様の真の姿が知らされるのですが、周りの人々は何者なのか分からないままなのです。

さて、「天が裂け」という表現が出てきます。今まで長く封じられていたものが開かれるのです。この動詞、あまり聞きなれないギリシア語の用法ですが、「神的受動態」という形です。受身形で、その行為者が神さまであるというものです。つまり神さまが天を裂かれた、神さまがこの世界に介入されたということなのです。そして神さまはイエス様に霊を降らせました。なお、この「裂け」という語は、イエス様が息を引き取った時、神殿の垂れ幕が裂けたときと同じ語です。

なお、新共同訳聖書で霊に“ ”がついている場合、「聖霊」あるいは「神の霊」「主の霊」を意味しています。つまりここで、神さまは聖霊をイエス様に注ぎ、み子としての任命をおこなったと言えるのです。

1:11 ~~すると~~(そして天から声がした)、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、~~天から聞こえた。~~

ここで天からの声は、イエス様が神さまの子であることを宣言します。マルコの洗礼物語は、「神の子イエス」というマルコのテーマに焦点を当てていきます。「わたしの心に適う者」は「わたしはあなたを喜ぶ」とも訳すことができますが、神さまによる選びを示します。旧約の時代、イスラエルは神さまからの選びの対象として識別されていました。その時に、この「適う(喜ぶ)」という語は用いられています。つまりここで強調されているのは、神さまが主導権を持った行為であるということ。天を裂いて神さまは歴史に介入して来られました。そしてイエス様に対し、「愛する子」だと宣言されます。

この箇所を通じてマルコ福音書は、わたしたち読者にイエス様は神の子であること、そしてこれから始まるイエス様の物語は、神さまの介入によって開始されたことを告知させるのです。

#### ◆誘惑を受ける

1:12 それから(すぐに)、“霊”は~~イエス~~(彼)を荒れ野に送り出した(追いやった)。

また霊が出てきました。ここも聖霊や神の霊という意味で考えてよいところです。

旧約の時代から、神の霊は預言者(エリヤやエゼキエルなど)を自分の意図しないところに連れていきました。今回もイエス様が意図したかどうかは関係なく、神さまのみ心はイエス様を荒れ野へと導きます。



ここで「追いやった」と訳した言葉ですが、放り出すとか投げ出すという意味もあり、かなりきつい意味で用いられます。したがって、わが子を谷底に落とす獅子のようなイメージも持つことができます。

さて、イエス様は荒れ野に行かれたのですが、古代の中近東において荒れ野は、悪魔や悪霊の住みかとして認識されていたようです。しかし一方で、出エジプトの40年間の荒れ野生活のことを、理想的なものであったと回顧する人たちもいたようです。当然、その40年を経験した人たちはもういません。しかしそこでの生活は神さまに守られたものであったと伝えられていた、つまり荒れ野は神さまに近い場所として考えられてもいたようです。新共同訳聖書ではこの「荒れ野」と同じ語が、「人里離れた所」や「人のいない所」と訳されています。そしてそれらの場所でイエス様は祈り、また5,000人に食べ物を配るのです。また、来るべきメシアはその民を荒れ野に導き出すと考えられてもいたようです。

1:13 イエスは（そして）四十日間~~そ~~ニ（荒れ野）にとどまり、サタンから誘惑を受け（試み）られた。その間、野獣と一緒におられたが、（そして）天使たちが仕えていた。

40 日間の荒野の誘惑の記事は、マルコではたったこれだけです。わたしたちが絵本や映画でなじんでいる誘惑物語は、マタイやルカの記事を元にしてあります。三年に一回、このマルコの箇所が聖書日課に出てくるのですが、結構大変です。

ここで特徴的なのは野獣と天使たちです。天使たちはマタイ福音書にもサタンが去った後で出てきますが、野獣はマルコ福音書のみです。イエス様と野獣が一緒にいるという場면을想像してみてください。人間と野獣とは一緒に暮らせません。でもその昔、共に暮らしていた時代を聖書は描いているのです。それはアダム時代です。楽園から追放される前、アダムはすべての動物の名前を付けた、名前を付けるというのは支配するということも意味するのですが、そのころには、人間アダムは野獣と共にいたわけ。ところが善悪の木の実を食べたことによってアダムは楽園から追放され、野獣との戦いも同時に始まりました。

ユダヤ教において、終末の時にはアダムの時と同様に、野獣は人間に危害を与えずに従い、また天使たちも人間に仕え、サタンはその力を失うと考えられていました。つまり、このイエス様の姿こそが、終末の時には起こると期待されていた状況だったわけです。その終末時の至福の状態、荒れ野での平和な状態が、このときのイエス様にはありました。

ところがイエス様は荒れ野での平和を捨てて、ガリラヤへと向かいます。人々の間に、今生きている民衆の世界のただ中へと進んで行かれます。世を捨て、荒れ野で世を批判した洗礼者ヨハネとは対照的に、イエス様は民衆の間で伝道をしていったのです。このことはわたしたちにとって福音なのではないでしょうか。イエス様が平和な荒れ野を捨て、わたしたちの元に来て招いてくださる、そのイメージを持ちながら福音書を読み進めていきたいものです。

この節について、おまけでもう一つだけ。マタイやルカと違って、マルコにはイエス様が断食したとは書かれていません。またマタイと違って、天使たちは最初から仕えていたようです。となると、この40日の間、イエス様は天使に養われていたのだろうか、という想像も掻き立てられます。



## ◆ガリラヤで伝道を始める

1:14 ヨハネが捕らえられた（引き渡された）後、イエスはガリラヤへ行き（来て）、神の福音を宣べ伝えて、

ヨハネとは洗礼者ヨハネのことです。「捕えられた」を「引き渡された」と訳しなおしましたが、この語は支配する側によって逮捕されることを意味する術語です。イエス様の運命について語る場面でも「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される」（9:31）などという使われ方をします。マルコ福音書が書かれた時代、キリスト教徒たちは迫害を受け、殉教の危険にさらされていました。つまりいつ、殉教の死に引き渡されてもおかしくなかったわけです。このマルコの記述は、「引き渡された」という術語のもとに、洗礼者ヨハネからイエス様、そして自分たち信仰者の間へと、一つのつながりを示しているのではないのでしょうか。

また、洗礼者ヨハネの活動が終わった時と、イエス様の活動が始まる時が、同じタイミングで書かれています。マルコは先駆者である洗礼者ヨハネとイエス様とを切り離そうとする傾向があるようです。前回、洗礼者ヨハネについて、旧約聖書の引用がありました。ヨハネはあくまでも旧約の時代の最後であり、イエス様の登場は、新たな時代の始まりを告げるのです。



さて、ここで「神の福音」という言葉があります。1節には「イエス・キリストの福音」という言葉がありました。この二つの語には、微妙な違いがあります。1節で言っている福音とは、イエス・キリストの良きおとずれでした。それに対してこの 14節の福音は、神の国について、イエス様が宣べ伝えた事柄です。イエス様は神さまから「神の国は近づいた」という使信を託され、イスラエル世界の中心であったエルサレムへとは向かわずに、ガリラヤという地方で活動をおこなうのです。

1:15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

「時」は満ちました。ここで使われている時とは、ギリシア語ではカイロスといいます。これは神さまの計画の中で定められている終末の救いの時のことです。洗礼者ヨハネは喜びのおとずれのはじめを告げましたが、イエス様は救いが間もなく完成することを宣べ伝えました。イエス様は、神の国は近づいた、つまり間もなく来るのだということを伝えたのです。

神の国とはどこにあるのでしょうか。ルカには『『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない』(ルカ 17:21) という表現も出てきますが、国といっても現代でいう国のように、ある特定の地域を指すものではありません。「神の国」は「神の支配」という意味もあります。つまり、救いの時がまさに来ようとしている、神さまの支配の時が近づいている。だから悔い改めなさい。つまりもう一度、神さまの方に向き直しなさい。そのようにイエス様は言っているのです。

そしてさらに「福音を信じなさい」と言われます。福音とはイエス様の生そのものでした。福音を信じるように招かれたわたしたちは、イエス様の生の中に自分の身を投じて、自分の生の場として生きる、つまりイエス様に倣い、生きていくことが求められているのではないのでしょうか。イエス様の生とはどのようなものであったのか、ここでマルコ福音書の序文は終わり、いよいよイエス様の生にわたしたちは聞いていくことになるのです。

今回の学びは、これで終わります。次回は6月26日(木)10時30分～で、「四人の漁師を弟子にする (マルコ 1:16～20)」について学んでいきたいと思えます。